

園芸家半田たきの明治後期の英国留学

—— 家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点から ——

Revisiting Japanese horticulturist, Taki Handa's studying Britain in early 20th century: family history and life history / life geography

星 珠 枝*
橘 セ ツ**

キーワード： 1. 園芸 2. 半田たき 3. スタッドレーカレッジに英国留学 4. 日本庭園
5. 家族史

Key word: 1. horticulture 2. Taki Handa 3. study at Studley College, Warwickshire, Britain
4. Japanese gardens 5. family history

要 旨

明治から昭和にかけて生きた日本人女性園芸家半田たき（1871－1956）は、1906年（明治39年）から1908年（41年）にかけて英国留学し、女子のための農業・園芸専門教育機関 Studley College（Warwickshire）で園芸を学んだ。彼女は英国留学中にスコットランドに在住する世界漫遊旅行者で園芸愛好家 Ella Christie の地所 Cowden Castle にて日本式庭園のデザインを行った。本稿では、たきの著した自伝『想ひ出の記』（1954）、家族に伝わるアルバム、日記などの文献資料と子孫による家族史研究の視点から、彼女の英国留学体験を中心とした彼女の人生全体を視野に入れたライフヒストリー／ライフジオグラフィーについて考察した。

I. はじめに

i) 家族史とライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点

近年、高齢化社会を背景として自分史や家族史を書くことに特に関心が持たれている。NHK文化センターなどのカルチャーセンターで「自分史を書く」という講座を長年担当してきた藤田敬治は、最近の自分史の内容と傾向を分析して、人びとが自分史を書くということは次のような考察を含むと論じている：

* 公益社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会常任顧問

** 神戸山手大学現代社会学部准教授

最初のうち、「自分史」を書くということは、単に自分の生きた証、歩んできた半生の足跡を記録する作業と考えて指導に当たってきましたが、多くの受講生たちと一緒に勉強を進めるうち、この作業には、実はもう一つ大事な側面があることに気づくようになりました。それは、自分という人間は一体どういう存在であったのかを探り、確認する「自分自身の再発見」という側面です。……自分とは何か、どういう人間か、と考えることは、また自分の父親・母親についても考え、さらにはもう一代前の祖父母から自分の血脈・ルーツについてまで考えることに及びます。これまで自分自身の誕生・生い立ちから書き起こすのが普通でしたが、この頃では、父親や母親のことから書き始める方や、さらに遡って自分の家系について詳しく調査し、資料を渉猟して、祖先やルーツのことから筆を起す方も増えてきました。(藤田, 2006: 3)

自分史を書くことは自分の人生をふりかえって、自分の人生の軌跡だけに目を向けた内向的な作業にとどまらない。それは自分と家族との関係を見直し、自分と家族の生きた時代を見直し、時代の流れの中に自分と家族を位置づけるという自らの外に向かって開かれた作業を含む。自分や家族や祖先のことを綴った自分史や家族史を書くという作業は、その個人や家族の間の内輪の出来事を通して、自分や家族が生きた時代や社会、文化などについて語ることにつながる。自分史、家族史を通じた「自分自身の再発見」は、自分が生きてきた時代、社会、文化の文脈の中に自らを位置づけ、つながりを再確認することができてはじめて可能になる。その結果は、時として貴重な歴史の証言の資料となる。

近年の人文地理学でも、自分史や家族史などの視点によるライフヒストリーと地理学との間の重なり合う部分が注目され見直されている (Daniels and Nash, 2004)。個人のライフヒストリーや自分史・家族史・自伝・伝記などで語られるのは個人の生きてきた多様な場所や空間であり、個人が生きてきた風景である。人文地理学の重要な概念である場所や風景は、それを見る人の見方や経験する人の経験の仕方によって、意味づけられ、造り上げられていくダイナミズムをもっている (Berger, 1972; Cosgrove and Daniels, 1988; Daniels, 1993; Mitchell, 1994)。個人は、どのように場所や風景を見て、経験し、記述したのだろうか。また人びとは、どのような理想の風景を夢見て、どのような風景を創造しようとしてきたのだろうか。

ダニエルズとナッシュが提唱するライフヒストリー／ライフジオグラフィーの視点は、かれらが、実際に目にして、その中に生き、語り、創造しようとした場所や風景の側からアプローチしてかれらの人生とかれらが生きた時代と社会、文化を照らし出そうという方法である。その作業によって、かれらの生きた時代と社会、文化の文脈に、かれらの人生を明確に位置づけられる (Daniels and Nash, 2004)。

一方、近現代社会の大きな特徴のひとつは、人びとは、生まれ故郷に生涯の間、留まって生

活するのではなく、人生の段階に応じて移動するようになったことだ。多くの人びとは、生まれ故郷をでて、勉学や仕事や結婚などを契機として移動を繰り返す。あるいは、人びとは楽しみやレクリエーションを目的とした観光旅行でも移動する。さらに、近現代社会に生きる人びとの移動の範囲は日本国内に留まらず、ビジネス、観光、留学、視察などの理由で、社会、文化を横断して移動するグローバル化社会が進展している。

筆者が関心をもっていることのひとつは、場所や風景が文化を横断した出会いによって、それまでにはなかったような新たな場所や風景に対する見方が産み出され、実際にそのような場所や風景が造り上げられるようなトランスカルチャレーション transculturation のプロセスである。

人びとの多岐にわたる実際の空間移動に注目して個人の人生をみるとき、ある個人が実際に目にして、その中に生き、語り、創造しようとした場所や風景の側から人生にアプローチするライフヒストリー／ライフジオグラフィーの手法はトランスカルチャレーションの視点からも、ますます有効になると考えられる。筆者は、旅行、植物、庭園をめぐる場所や風景のトランスカルチャレーションについてライフヒストリー／ライフジオグラフィーの手法でアプローチしてきた (Tachibana, 2000; Tachibana et al. 2004; 橘, 2006 ; 2008 ; 2009 ; 2010)。

本稿の主人公である半田たき (1871-1956) は、明治から昭和にかけて生きた日本人女性園芸家である。たきの空間的な移動の軌跡を簡単に追ってみよう。たきは1871年 (明治4年) に久留米に生まれ、小倉、熊本で育つ→1892年 (明治25年) 同志社女学校で学ぶため京都に移動、1895年 (明治28年) 6月卒業→香蘭女学校に教師として就職したために東京に移動→再び、京都に戻り1900年に同志社女学校に職を得た。在職中、彼女は1906年 (明治39年) から1908年 (41年) にかけて英国留学した。留学中も、スコットランドをはじめ見聞をひろげるために多くの距離を移動している。1908年11月に英国から帰国後、たきは京都に戻り、1909年に同志社女学校に復職する。1910年、たきは一男五女のいる陸軍軍医中目成一と結婚し京都に家庭を持った→その後、1919年に同志社女学校を退職し、一家で仙台に移り住む→婚家中目家の故郷の水沢 (岩手県、現在奥州市) にて1921年ごろから果樹の苗木の栽培をはじめ、1925年には果樹園経営のため一家で水沢に戻る。長男誠吾の結婚を機に、果樹園を長男にまかせ、たき夫妻は1931年に水沢から京都に移り住み、たきは同志社女学校の同窓会の事務を1936年まで勤める。京都在住の1938年に夫、中目成一が逝去する。引き続き、たきは京都にとどまったが、太平洋戦争がはじまり、1941年に再び水沢に戻る。水沢にて晩年を過ごし1956年 (昭和31年) たきは87歳で生涯を閉じた。これらの居住地移動以外にも、たきは自伝『想ひ出の記』や『期報』に記されているだけでも、多忙な家事の合間をぬって短期の旅行として、江ノ島、金沢、十和田湖、北海道、さらにはハルピンなど日本国内外の移動をしばしば行っている。

このように、明治から昭和にわたるたきの人生を空間移動の側面からふりかえっただけでも、近現代社会に生きる人びとの特徴のひとつである社会、文化を横断して移動するグローバリズ

ムの先駆的な一側面を映し出している。

たきの人生における空間移動の側面からみたハイライトのひとつは、たきが1906年から1908年にかけて英国留学し、女子のための農業・園芸専門教育機関 Studley College (Warwickshire) で園芸を学んだことだ。さらに、彼女は英国留学中に、スコットランドに在住する世界漫遊旅行者で園芸愛好家のエラ・クリスティー Ella Christie (1861-1949) の求めに応じてエラの地所 Cowden Castle にて日本式庭園のデザインを行った。

本稿では、たきが人生の中で実際に目にして、その中で生活し、語り、文化を横断して創造しようとした場所や風景の豊かさについて垣間みることにしよう。

(橘 セツ)

半田たきは、本稿の著者である星珠枝の祖母である。星珠枝は、家族史の視点から祖父母である中目成一・たき夫妻の人生について深い関心を寄せている。星珠枝は、祖父、陸軍軍医の中目成一の人生の軌跡を追ひ、台湾などへ調査旅行を続けている。さらに、星珠枝は、祖母中目(旧姓・半田)たきの英国留学の軌跡を追うことにも情熱を傾けている。

今年(2011年)の夏、本稿の二人の執筆者である私たちは、半田たきの英国留学の道筋をたどった。まず、私たちはスコットランドのクラックマナンシャーにあるエラ・クリスティー Ella Christie の地所 Cowden Castle の日本式庭園の跡地を訪ねた。たきは、スコットランドの地主エラ・クリスティーの望みをかなえるために、1908年にエラの地所 Cowden Castle に滞在して、日本式庭園のデザインを行った。エラは、1907年(明治40年)に世界漫遊旅行の一環として日本滞在中、日本庭園を訪れ、日本庭園の風景と「恋に落ち」た(A. Stewart, 1955)。エラは、ただちに故郷のスコットランドの地所に日本庭園を造ることを計画して生涯をかけて実践した(Tachibana, 2000; Tachibana et al, 2004; 橘, 2008)。私たちは、エラの地所を現在引き継いでいるエラの妹アリスの孫であるロバート・スチュワート夫妻にお会いして、エラとたきについてスチュワート家に伝えられている話や写真などの資料を見せていただいた。この訪問は、たきの孫の世代とエラの(妹の)孫の世代の庭園を媒介とした100年あまりの時をこえた再会であった。さらに、私たちは、たきが園芸を学んだ Studley College (Warwickshire) の跡地(現在は Studley College があつた建造物 Studley Castle を改修利用したホテルとなっている)を訪ね、たきが学生時代を過ごした当時の面影を求めた。

次に記すのは、たきの孫である星珠枝による家族史の視点からみた祖父母中目成一・たきに対する思いの一端である。

ii) 星珠枝の家族史の視点

私(星(旧姓:中目)珠枝:昭和7年生まれ)が、家族史に興味を抱いてから相当の年月が経つ。父(祖父中目成一の長男、誠吾:明治33年台南生まれ。当時、成一は台南衛生病院長と

して台南勤務)が家系に興味を示しており、そのあとを引き継ぐ形で調査を続けてきた。我が家は、伊達藩一門留守藩で、代々家老職を務めていた。本家は天正年代、伊達輝宗時代まで遡れる。家格は伊達一家。系図からでも、時代の流れに翻弄された様子が見て取れる。慶長19～20年、大坂冬の陣、夏の陣に出陣、その後、失脚。元和4年には田地没収されている。その原因はどこを探しても、その史実が解明できない。曾祖父時代は戊辰戦争で藩境の地を守った。史実に名前が出てくるとその時代を生きていた実感を感じる。伊達家臣で名の知れた武将が出てくるドラマは、それだけで、自分もその場に居合わせたような緊迫感に襲われ、感激は無常の喜びと変わる。あたかもその時代を生きているかのような錯覚の中で、「生命」が共有できる。

共に暮らしたことが少ない祖父(中目成一)の記憶はおぼろである。しかし、日記や時代小説、祖母が編纂した成一の遺稿集『偲ぶ草』の記述を通じて、私も一緒に時代を生かされる。日露戦争に従軍した祖父の周囲には私が知っている歴史上の人物が息づいている。森林太郎、斉藤実、白たすき隊長の中村覚は父誠吾の名付け親である。短刀に添えられた和歌が残っている。二〇三高地の激戦の戦闘状態が目につく。祖父はその激戦地で、兵站を預かり、下痢・脚気で戦力が低下していく兵士とともに軍医として戦った(中目、1939)。台南に足を運んだ。祖父が働き、父の生まれた土地である。先祖と同じ暮らしの土地に立つその感慨は何物にも代えがたい喜びとなる。気象・気温・風・海の色、人々の眼差しまで、すべてが祖父と重なり、私の血が騒ぐ。

祖母(中目たき)と一緒に暮らしたのは、私が新制中学、高校生のころからである。孫を背中におおいお守をする隣近所の婆っちゃんとはまったく違っていった。おばあちゃんに英語を習うときは、いつもドアをノックして入った。他人行儀のようなよそよそしさを感じていた。おばあちゃんはいつも従妹のことばかり話していた。なにかが違う。近づけないのはなぜだろう。おばあちゃんが英国で暮らしたことがあることは知っていた。私のひそかな楽しみは、クレゾール臭の漂う物置にもぐって外国からの郵便切手を探すことであつた。戦後、進駐軍の通訳の現場を目の前にみて、私の祖母への印象が一変した。それ以来、「すごい」の一言が私の身体に渦巻いていた。

父は、祖母が継母であることを私が物心がつくまで話してくれなかった。いとこと距離があつたのは、血の繋がりが無い故なのだろうか。結婚後、私と祖母の心の距離は急速に縮まった。祖母が結婚後も仕事を続けられた訳はなぜだろう、仕事と子育てが両立できたのは…。さらに60代過ぎてもお、仕事を続けたのは…。私が解決できないでいることを明治・大正・昭和を通じてやり遂げられたのは…。この課題を捜して私は英国へ祖母の足跡を訪ねて再訪(2007年、英国旅行)を試みた。

身近で暮らす家族は、わかっているようで実はなにもわからない。100年前の祖母とどのような形で、向かい合うことが出来るのだろうか。私は祖母の晩年しか知らない。祖母が私の結婚

祝いにと贈ってくれた「仙台つい朱塗りの文箱」が残っている。それを見ると玄関で旅立ちを祝ってくれた、祖母の温かい手のぬくもりが伝わってくる。今回のスコットランドの旅で、祖母の生き方が投影されたとき、厳しい時代、家事に押しつぶされていた時代、結婚と同時に家族の苦難が襲いかかった時代。それでも信念を貫いて命を全うした生き方が見えてくるものと信じている。その強さは、バックボーンはどこからきているのか？ …旅から帰った。遠くリトルたきのはじける声が耳元で広がる。牧場の柵を飛び越える元気な祖母、和服姿で、キャッスルの鏡の前にたたずむしとやかな祖母、どのシーンもいきいきと今に蘇ってくる。躍動する祖母の姿が現在も生きていること。その実感を共有できる幸せに、ただ涙が頬を伝う。

(星 珠枝)

次のⅡ章では、半田たき（1871－1956）についての主な資料を(a)から(e)の5種類に分けて紹介する。Ⅲ章では、半田たきのライフヒストリー／ライフジオグラフィーについてⅡ章で分類した(a)から(e)の資料に基づいてたどる。さらにⅣ章では、半田たきの明治後期の英国留学（1906～1908年）に焦点を当てる。今回、私たちが英国を再訪して得た成果もふくめて、たきが Studley College（Warwickshire）でどのような学生生活を送ったのか、また、たきはどういうスコットランドの Ella Christie の地所 Cowden Castle で1908年に日本式庭園をデザインしたのか資料に基づいて考察する。なお本稿の最後に(a) 中目たき（1954）『想ひ出の記』に所収される「蘇蘭（スコットランド）に於ける日本式築庭」（p.92-97）を資料紹介として示す。

Ⅱ．半田たきについての主な資料

本稿で扱う半田／中目たきに関する資料は、次の5つに分類できる。

- (a) 中目たき（1954）『想ひ出の記』協栄新聞社出版局
- (b) 同志社女学校の機関誌『期報』に掲載されたたきについての記事
- (c) たきが「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」
- (d) たきの日記『敗戦色日記』昭和21年の日記
- (e) 家族（たきの孫の世代）の記憶による証言

(a)は、たきが77歳を迎えた記念として著した自伝である。たきは1947年（昭和22年）1月から『想ひ出の記』を書き始め、1949年（昭和24年）7月に完了したと伝えられる。中目家には、たきの自筆による詳細な項目の下原稿が残っている。このたきの手稿によるとタイトルは『思ひ出の記』であった。この原稿がたきの姪の子どもの手によって、『想ひ出の記』として自費出版されたのは、1954年（昭和29年）5月であった。巻頭でたきは次のような短歌を詠んで書きはじめている：

明治7年よりの想ひ出の記

七十七女

七十七の山坂越えし想ひ出の 書きつらねみん今日の記念に

さらに、たきは夫、成一の没後に成一の遺稿集『偲ぶ草』を1939年（昭和14年）に編纂している。『想ひ出の記』『偲ぶ草』ともに半田／中目たきの人生の軌跡を探求するうえで貴重な一次資料である。

(b) 同志社女学校の機関誌『期報』に掲載されているたきについての情報は、短い消息記事から「会員の通信」や「雑纂」欄に掲載された数頁にわたる長文の記事まで多岐にわたる。『期報』に掲載されたたきの記事を見ると、1892年（明治25年）に九州から京都に来て同志社女学校に入学し優秀な成績で卒業して以来、同校で教員生活を経て、同窓会の専任事務員を1936年で退任するまで、たきの人生にとって同志社女学校とのつながりは深かったことが理解できる。とくに京都を離れていた仙台・水沢時代に、たきは子どもたちの成長などを含む自らの家族の生活の詳細な報告を『期報』の通信記事として掲載した。たきは同志社女学校で多くのよき師と友人にめぐまれた。たきが同志社女学校にかかわっていた時代は、後に「同志社の宝」と呼ばれるアメリカン・ボードの宣教師ミス・デントン（1857－

1948）が同志社女学校で教員をしていた（小野，1988；同志社女子大学125年編集委員会，2000；クラブ，2007）。たきが同志社女学校でデントンと師弟として、後には友人として培った信頼関係はあつく、たきの人生の岐路の選択のたびにデントンの存在と彼女のアドバイスを生き方の指針として大きな影響を与えた。

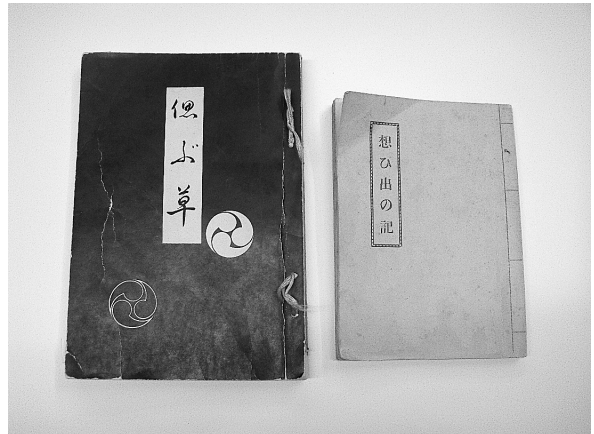


図1 『想ひ出の記』と『偲ぶ草』の表紙。和綴じ本である

（出典：星珠枝提供）

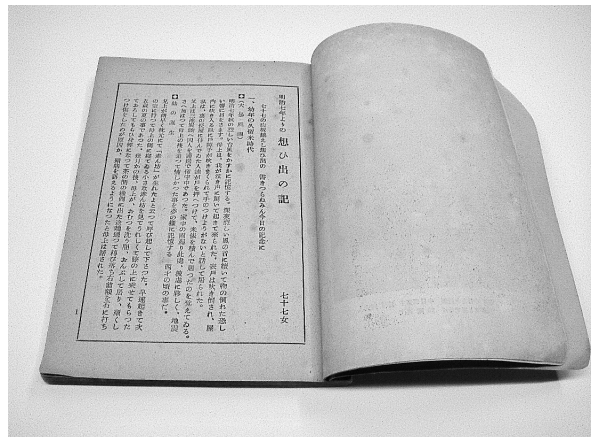


図2 『想ひ出の記』の1頁目

（出典：星珠枝提供）

『期報』に掲載された、たきの英国留学について記している記事は：

- 会員消息：「半田瀧子は昨年8月13日御出発、英国遊学の途に就かれしが、御着英後はワー井ックシヤィア州スタッドレー大学にて熱心に園芸を御研究の由、シェークスピアの故郷ストラトフォード、オン、アヴォンは同州にありて、程遠からぬ所なれば、己に足を運びて昔を忍ばれしや否。(通信欄参照)」『期報』24号、1907年(明治40年)
- 会員の通信：「在英国半田瀧子の書信」『期報』24号、1907年(明治40年)
- 会員消息：「半田たき子姉(28普)本校植物学教師にして去る39年来英国留学中なりし同姉は本年10月初旬ロンドン出帆の日本郵船にて11月19日神戸に上陸し、直に母校に來られ、数日滞在の上、郷里福岡県に帰省せられたり。因に同姉の令兄は今回大阪陸軍病院長に補せられたる由。」『期報』26号、1908年(明治41年)
- 雑纂：「粗末なお土産話、半田たき」(p.53-61)『期報』27号、1909年(明治42年)
- 雑纂「粗末なお土産話(続)、半田たき」(p.21-25)『期報』28号、1910年(明治43年)

とくに『期報』27号と28号に連続して掲載された雑纂「粗末なお土産話」は合計14頁にわたり英国 Studley College での留学生としての学業と社交生活が記されている充実した資料である。

(c)から(e)は、中目たきの家族・子孫に伝わる資料である。(c)のアルバムは、表紙に「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」と記されている。写真の裏にもたきの手稿のメモが記されていることがある。たきの英国留学中の写真もこのアルバムに多く所収されている貴重な資料である。

(d)はたきの手稿の日記であり『敗戦色日記』(昭和21年の日記)と題されている。水沢での長男誠吾一家との生活、果樹園をめぐる身辺雑記がつづら



図3 たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」の表紙

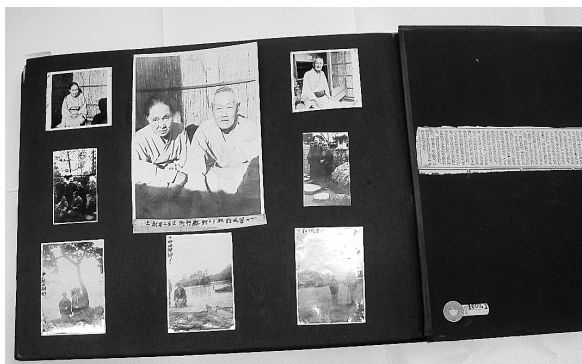


図4 たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」のはじめの頁にある中目成一・たき夫妻の写真

れた資料である。

(e)の家族（たきの孫の世代）の記憶による証言などの資料収集のために、本稿の両執筆者は、かつてたきが家で果樹園を経営していた水沢の福原の地を訪ねた。そこで星珠枝の妹、房枝氏と弟、中目一行・静子ご夫妻から話を伺い、たきについての資料を見せていただいた。

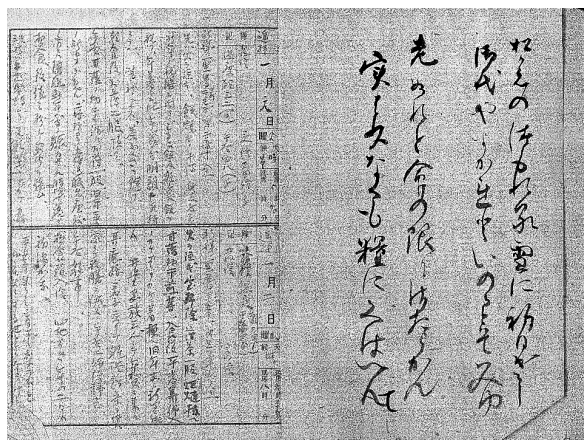


図5 たきの記した『敗戦色日記』（昭和21年の日記）のはじめの頁

（出典：星珠枝提供）

Ⅲ. 日本人女性園芸家半田たき（1871－1956）のライフヒストリー／ライフジオグラフィー

i) ガンバリ屋さんのたき

半田たきは、1871年（明治4年）3人兄妹の長女として九州久留米市に生まれた。『想ひ出の記』のなかでたきは、子どもの頃の記憶をいきいきと語る。たきのはじめの記憶は4歳のころ明治七年秋におこった大暴風雨。やがて妹が生まれる。7、8歳の頃には、たきは学校から帰ると木綿車で糸紡ぎをするのが日課であった。たきは自分の紡いだ糸がたまると「母上は縦横縞の単衣を織って着せて下さった時は、本当に嬉しかった」（中目，1954：2）と子どものころの経験を語っている。

たきは学校の勉強のほかに漢学と英語を週3回習った。これは、たきの兄の勧めであった。たきの兄は、子どもの頃からずばぬけた秀才であり、後に軍医となるが、いつもたきの味方であり、たきを助けてくれた。たきは県立師範学校附属高等小学校では、後に徳富蘆花夫人となった原田愛子さんと同級生であり親しかった。たきは彼女と気心が合い、生涯の友人として長くつきあった。

たきは、将来は「教育者」を目標として、高等師範学校入学をめざして尋常師範学校で夢を持って勉強していた。しかしながら、たきは病弱のため人より教育を受ける時期が遅かったせいで、クラスではいつも年上で恥ずかしい思いをしていた。一方、たきはキリスト教会に出席しており、教会でよく外国人に接していた。やがて、たきはキリスト教徒になる決意をし、16歳のときに洗礼を受けた。

たきは、幼少のころから身体はあまり丈夫でなく、よく風邪をひいていた。それが原因でたきは高等師範学校への受験資格を失った。そのため、たきは神経衰弱になるまで、追い込まれて行く。たきはそのことを「絶望の極み」「心が空虚になった」と表現している。そこでたき

は1年ぐらい休養をとった。この状況を母親や兄が慰め心配してくれた。兄が心配しなくてもよいと言ってたきに入学を勧めてくれたのが、京都の同志社女学校である。

たきは1892年（明治25年）に九州から京都に来て同志社女学校に生徒として入学した。たきは同志社の印象を記す。「同志社女学校の建物は、貧素なこと福岡師範のそれと比較にならぬものであったが、先生方と生徒との間は、暖かにして、親しみのあることは、また雲泥の差があった」（中目、1954：27）。たきは熱心に勉学に励み、1895年（明治28年）6月同志社女学校を卒業した。同志社女学校普通科に入学したときにはたきは数えて23歳であった。専門部師範科卒業のときに、たきは27歳になっていた。たきはどんなときでも「勉強したい」という気持ちを失わなかった。

ii) 教育者として

同志社女学校の卒業と同時に、たきは東京麻布区永坂にある私立の香蘭女学校に勤めた。香蘭女学校は英国聖公会の聖ヒルダ伝道会に付属していた。たきは、はじめの2年は、聖ヒルダ伝道会の宿舎に宣教師とともに住み、厳格な修道院生活のような暮らしを味わった。聖ヒルダ伝道会で、たきは、童話を翻訳し、宣教師たちに日本語を教えた。しかしながら、たきは、はじめの目的通り、女学校の生徒に教えることを希望し仕事内容を変更した。同時に、たきは、女学校内の宿舎を出て、生活の場を英国婦人ウエストーン嬢の私塾に移した。たきは次のような感想を述べている：「聖ヒルダの生活は、丁度修道院めいた感じであったが、ウエストーン塾に移ってから普通基督者の家庭感を、得ることが出来た」（中目、1954：38）。

この時期、たきは、植物学の研究をはじめめる。毎週土曜日に小石川植物園に通い、園内の植物を調べた。たきは、植物学会員となり、女一人の会員として講演会にも参加する：「月に1回の講演会にも出席して、傍聴する機会を與へられた。女子は私一人であったので、男子の中に入って牧野博士を第一として学士連の高説を聴くことが出来たが、女は一人の為にウエストーン女史が何時も附添って下さった」（中目、1954：39）。

たきは、桜花の季節、休暇を利用して親友、徳富蘆花夫人となった愛子さんを逗子に訪ねた。かれらは、江の島や鎌倉、横須賀碇泊中の軍艦富士を見学した。さらに明治32年のお正月には、再び徳富蘆花夫妻に招かれて時を過ごした。正月の書初め、徳富家の家族が次々と自作の和歌を揮毫するなか、たきの順番が来た時の思いをたきは語る：「私は兼々理屈っぽくて和歌を厭ひ駄目だと、あきらめていたので、自作などは、如何にひねり出さうとしても出て来ない。大困りの後遂に古歌を盗み書して、其場をふさぎ和歌修養の必要なることを、熟々覚つたことであつた」（中目、1954：40）。たきは東京で興味のあることを何でも経験したいと前向きな生活を過ごした。3年間の賑やかな東京の生活を後にして、たきは京都へと戻ることとなった。

iii) 母校同志社女学校に帰る

明治33年4月。たきは母校、京都同志社女学校に乞われて戻り、再び京都での生活を始める。たきは今度は、学生の身分とは違い責任ある教師の立場となった。しかしながら同志社は困難な時代を迎えていた。当時同志社を出て東京在住であったデントン先生をはじめ同窓会の友人達も反対したが、松浦政泰教頭に頼まれ、たきは同志社女学校で教えることとなった。そのとき、たきは一生を同志社女学校のために捧げんと祈って決心する。たきが担当したのは、英語と園芸であった。

たきは、植物学研究に関しては、小石川植物園に心を遣って東京を去った。しかしながら、たきは、植物学への志があれば、自ずと道が開けると信じ京都の同志社女学校へ異動した。結果的に非常に恵まれたものとなった京都の同志社女学校での植物学の研究環境についてたきはこう述べる：「京都に帰ってみれば又植物の研究には、採集の便多く、同志社理科学学校にて、顕微鏡の使用も出来るし、物理化学の実験も得らるるし、却て勉強の為めには便利であった。男校の先生方の援助を得て、生徒を同伴比叡、鞍馬の諸山に度々採集を試み、植物標本を製して、図書館を整理し、教材に用いることが出来た」(中目, 1954:44)。

同志社に復職したデントン先生を通じて、明治35年の夏、たきに思いがけない話が持ち上がった。それは「米人観光者レ、ブツィエー氏の家族を、箱根日光等に、植物採集旅行の随行」(中目, 1954:48)というたきへの誘いであった。日程は6月初旬から3週間。一行は「レ、ブツィエ」Le Boutillier 家族ご夫妻と2人の子供(チャールズ9歳・ヘンリー4歳)と家庭教師シャープ嬢の5人であった。たきは植物採集の案内と資料整理、さらに日常生活の通訳も担当した。

『想ひ出の記』の記述によると、たきは、6月6日から7月2日まで次のようなスケジュールで主として箱根と日光の植物採集と観光旅行をする「レ、ブツィエ」Le Boutillier 家族に同行した：

たきは、6月6日夜行で京都を出発し国府津で7日にレ、ブ一行と待ち合わせた。国府津－(電車)－湯本－徒歩登山－箱根宮ノ下、富士屋ホテル泊(植物採集)－11日朝「子供は籠、他は走行登山」→芦ノ湖畔の箱根ホテル泊(「さかさ富士」眺望絶佳、湖上に舟遊び、「ちいさな日本旅館」和装で写真撮影)→13日東海道街道を経て、湯本(電車)国府津(電車)東京築地「メッロポール」ホテル泊(買物や見物)→17日、金谷ホテル(日光東照宮見学、雨のため午後は室内で植物を検べる)→徒歩→21日中禅寺ホテル(植物採集「ドーランツツジ」)→23日、日光、金谷ホテル→24日、品川までレ、ブ一行に→東京→横浜へレ、ブ一行を見送り京都に帰着したのは7月2日。

たきは植物学専門家として旅行中、任された仕事を次のように記す：「私には別個に一室を

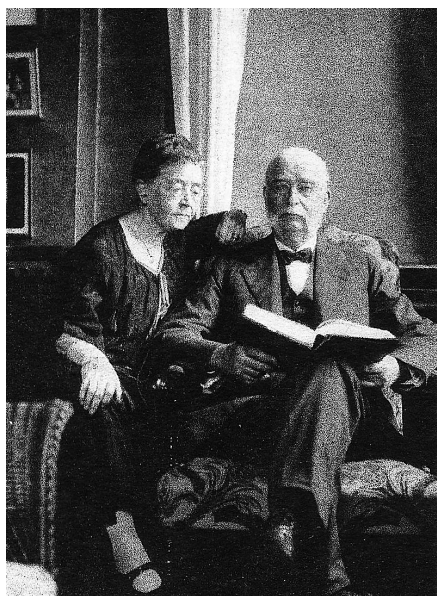


図6 アメリカ人「レ、ブツィエ」Le Boutillier 夫妻。たきに1922年におくられたクリスマスカードに添えられた写真より

(出典：星珠枝提供)

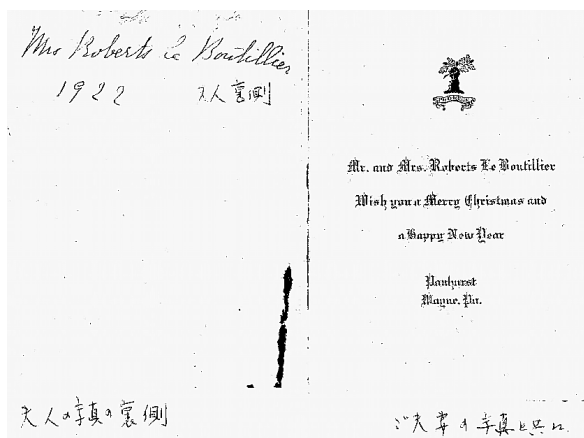


図7 「レ、ブツィエ」Le Boutillier 夫妻の写真とともにたきに1922年のクリスマスにおくられたカード

(出典：星珠枝提供)



図8 「レ、ブツィエ」Le Boutillier 夫妻の箱根・日光植物採集旅行に同行した半田たき。和装する「レ、ブツィエ」夫人と家庭教師シャープ嬢。芦ノ湖畔の箱根ホテルにて

(出典：星珠枝提供、中目家所蔵：たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」(資料(c)より))

與へられ、採集した植物を調べて、和名と学名とを書き込み、標本を製作することであった。採集した植物の数によりて、早く済むこともあり、夜までかかることもあり植物名集一冊を頼りに、此仕事を着々と進めた。又自分即学校の為めにも標本製作を許されていたので、沢山の土産も出来たことは、感謝に堪へないことであった」(中目、1954：50)。

レ、ブ氏は写真撮影が趣味であり、旅行中多くの写真を撮影した。芦ノ湖畔の箱根ホテルでの写真撮影のエピソードをたきは記す：「レ、ブ夫人とシャープ嬢とが、私の和服を着て、私

と三人テーブルの前に座っている處を、レ、ブ氏が撮影せられしものを、後日青写真にして、米国より送り越された」(中目, 1954: 50)。(図8 参照)

この採集旅行がたきの将来の幸運をもたらす原因になった。たきの英国留学の奨学金はこの「レ、ブツィエ」氏によって用意された。長年の夢がかないたきは1906年から1908年までスタッドレー・カレッジへ英国留学が実現した。

iv) たき結婚

たきは、英国留学から1908年11月に帰国して、1909年に同志社女学校に復職した。たきは1910年に結婚することになった。

たきの結婚相手、中目成一はたきが最も嫌いな陸軍軍人(軍医)であり、休職の辞令受けたばかりであった。しかも相手は再婚で一男五女の家庭(「先方は既に嫁したる娘二人と家に四人の子供があつて末娘が四歳位である。」(中目, 1954: 106))であった。たきは兄の勧めではあったが、なぜ結婚に踏み切ったのだろうか。

中目成一の立場からみると、仲人に対して次のような理由でたきとの結婚の仲介を依頼している: 「その経歴から推定するに、家事の処理、日本婦人としての常識の発達是不十分なところがあるかもしれない。しかし、志操堅固にして教育的経歴に富めるは得がたき長所で、わが子女の教育を托するに足らん」(中目, 1939: 108)。

たきは結婚について次のような希望があった。たきは英国に留学する際に同志社女学校と帰国後もひきつづき母校で教師を続けるという約束をかわしたので結婚後も京都に在住して教師



図9 「レ、ブツィエ」Le Boutillier 夫妻の箱根・日光植物採集旅行に同行した半田たき

(出典: 星珠枝提供、中目家所蔵: たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」(資料(c)より))



図10 「レ、ブツィエ」Le Boutillier 夫妻の箱根・日光植物採集旅行に同行した半田たき。カゴをかたいでポーズをきめるロバート・「レ、ブツィエ」と半田たき

(出典: 星珠枝提供、中目家所蔵: たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」(資料(c)より))

を続けたい。さらに、たきはクリスチャンとして教会の仕事も続けたいという希望があった。これらのたきの希望を結婚相手の中目成一がすべてを承諾し受け入れてくれた。したがって、たきは結婚を断る理由がなくなったとして結婚を承諾している。ふたりは同志社総長原田助氏の司式で1910年4月挙式した。

結婚後もたきは教師を続けた。たきは週に6、7時間の授業を受け持った。たきの担当はひきつづき英語・園芸である。翌年には、たきは女子を出産する。2年後にもたきは女子を出産する。また、嫁に行った娘が病気で実家に戻り自宅療養する。一方では結婚する娘がいる。さらにたきは同窓会会長に就任している。たきは手がいくつあっても足りない忙しさだった。たきは「結婚2年で、妻となり、母になり、おばあちゃんになり面白い経験をした。」と同志社女学校『期報』30号に報告している。その期間に、たきは実子を亡くす悲しみを味わい、孫の出産の手伝いに遠方まで出かけている。そこには、一般の家庭と変わらない生活も見える。

たきは同志社女学校を1919年（大正8年）に退職し長年住み慣れた京都から仙台に移住している。かれらは一家で夫の郷里である水沢（現奥州市）に帰るのが順当であるが、子どもの教育を考えると、水沢は高等教育に向かないからと仙台に移住することになった。子どもも順調に成長しており、夫は老年で仕事につくことが出来ない。たきは仕事がありすぎて、毎日忙しく、手が4つもあればよいのにとすることがたびたびあった。忙しくても健康で、神様のお恵みが加わっていくのに感謝しつつ日々を暮らしていると日常生活をたきは、『期報』48号（1923年）に綴っている。

ⅴ）郷里で果樹園経営

夫が現役を退き、経済面が厳しくなる中で、たきは20年先の生活を考えて果樹園経営を夫の了解のもとではじめている。初めての土地で新事業に着手することは、どれだけ大変なことであっただろうか。

1921年、中目果樹園は県立農事試験場の指導園としてスタートしている。盛岡から技師吉田氏が出張してきて、栽植地の縄張り、土掘り、馬肥料入れ、苗木植え付けをしている。栽植地の坪数1260坪、人夫9人と手伝い3人。馬肥料235貫。1925年には、子どもの教育も目途がついたとしてたき一家は水沢へ移っている。

たきは水沢の表小路の本籍地の母屋から果樹園までは遠方なので、福原へ隠居所を作って、果樹園の仕事がし易いよう生活環境を整えている。隠居所の建築費は3950円。たきはこの頃の果樹園についてこう述べている：「後藤多利松さん夫妻を常雇人として、果樹園の仕事を初む。果樹は五年位の幼樹なれば間作に麦、馬鈴薯、其他の果菜、根菜、葉菜類を栽培し、是等は大抵多利松さんの手によりてなされた。林檎や梨果は未だ結果するに至らざるも、葡萄は既に収穫あり、また苺を栽培し少し宛収益を得た…」（中目、1954：111）。

たきは果樹園の創世期、仕事が軌道に乗るまで、季節を通じて果樹園の仕事を支えた。昭和



図11 中目果樹園の前で。中目たき、
長男誠吾夫妻、孫の珠枝と房枝
(出典：星珠枝提供)



図12 中目果樹園の苺摘み
(出典：星珠枝提供)

7年、長男が大学を退学し、県農事試験場の研究生として、果樹園を継ぐ決心をした時、経営を長男にゆだねて祖父とともに京都に移住している。

懐かしい京都でたきは同窓会の事務を引き受ける。1936年（昭和11年）には同窓会事務を後輩に引き継ぎ、仕事から引退する。1938年、夫成一が逝去する。1941年（昭和16年）に京都を引き上げるまで、たきは休務寺で一人暮らしを続ける。その間に、夫、成一の『偲ぶ草』の編纂を終わらせ、たきは1カ月間の旅程でハルピン旅行をしている。

vi) 余生を水沢で過ごす。

たきは水沢へ帰郷したときは、古希を過ぎ72歳になっていた：「終戦後の生計独身の身に困難となりしを以て、誠吾に迎へられ郷里水沢に移住することとなつた」（中目、1954：127）。

昭和21年にたきが記した『敗戦色日記』には、たきの一日の生活が詳細に記録してある。遙拝、聖書朗読、部屋の掃除、薄茶一服。朝食後縫物、家族の足袋、モンペ仕立て、手紙の発信、訪問者名、また、亡き父母や子どもの命日等も細かく記している。『敗戦色日記』には、たきの戦後の暮らしが手にとるように理解できる。

たきの人生を『想ひ出の記』を読むことでたどった孫の星珠枝は、家族として次のように祖母の人生を考察する：「祖母の日記には、至る所に「西の都、京都への想い」が綴られている。晩年の祖母しか知らない私が、祖母の全生涯を理解できたのはこの『想ひ出の記』によるものがほとんどである。京都の暮らしが40年以上になる祖母にとって、生まれ故郷以上に係わりの

深かった京都は、祖母の人間形成に深くかかわっていることはあきらかである。それらへの想い、願いを胸に秘めて、祈りに変えて生きてきた郷里での生活。』

たきの晩年とともに家族として過ごした孫の星珠枝がたきと果樹園の思い出を次に記す。

vii) 孫珠枝の果樹園の記憶

祖父母と私

祖父（成一）の記憶はいつもこころにある。北の6帖の部屋には軍服正装姿の祖父の肖像画が飾られており、いつも慈愛にあふれ、やさしい眼差しを注いでいた。もっとも印象に残っている。

祖父の記憶は、京都八瀬の河原で喜寿の祝いの宴に出席した時のことである。相好を崩した祖父と家族の写真、皆が輝いて幸せな様子に見えた。川にはまって、靴下を濡らした私は素足で写っている。廊下で囲碁を楽しむ祖父。晩年の祖父が思い出に残る。

祖母（たき）は、いつも大きな拡大鏡を手に分厚い英書を読む姿。進駐軍の通訳をしている姿。いけばな・御茶をたてている丸い背中の後ろ姿。祖母が笑っている姿はあまり記憶にない。食事の時は「朝の果物は金。昼は銀。夜は銅なの」と、くだものが出るたびに英国の言い伝えと聞いて聞かされていた。祖母に英訳を習うことはとてもうれしかったけど、直訳がしっくりこなくて不満だった。

祖父母とも京都に住んでいたので一緒に過ごした期間は短い。特に祖父とは、ともに過ごした期間は少なく、記憶も断片的にしか思い出さない。

果樹園の昔と今

太平洋戦争前は、ほとんど記憶になく、苺狩りと剪定に出張してくる盛岡の指導員が印象にのこる。母は接待で手を休める時間もなかった。一日中忙しく食事、入浴の世話などで働いていた。子ども心にいろいろおじさんたちとお話できることがとてもうれしかった。指導員の私たちは、雪焼けで真っ黒な顔に、目だけがくりくりしていた。

高校生になると友たちが袋かけのアルバイトにきてくれて、たのしかった。脚立から落ちた話、こずかいの使い道などなど他愛のない話しは、やむこともなくつづいた。夜なべには、袋張り、実りの季節には、親戚の男の子がドロボーよけに夜警にやってきた。祖母も夜警の経験があり、「夜なべにいろんなものを持ち出して一人の夜を過ごしていた。」と記録に残っている。京都の比叡山で避暑を過ごした夏の夜と同じような光景を楽しんでいた。みんなが望まない仕事にも、たきのポジティブな姿勢が感じられる。

季節とともに、果樹園の様子は変わる。私の果樹園への思い出は、結婚して水沢を去るまで続く。スキーを履いて雪の上を剪定した枝を片づける。初夏、白い花が咲く季節、下草に寝転

んで味わう、ひんやりした感触は忘れられない。

戦時中の食糧不足を支えた果樹園。艦載機からB29が飛んできて、モモを採りに出かけた母が、命からがら防空壕に逃げ込んだ様子がいまでも鮮やかに目に焼き付いている。

幼児のころはいたずらをすると、よく地下室に閉じ込められた。そんな時は収穫後のリングをかじりながら、だれが助けに来てくれるのだろう。と天窓から外を見上げては助けを求めている。洋ナシを熟成させるのに、父はタンスのもみ殻を利用して、いとおしそうに眺めては、熟すのを楽しみにしていた。リングはインド、スターキングが別格で、国光・紅玉・エイケンを作っていた。二十世紀梨・ブドウの棚の下をよく駆け回った。みななつかしい。戦時中は、食料不足からリングを求めていつも行列ができた。

果樹園の仕事以外は家族で百人一首を楽しんだ。「一字決まりを覚えておくと早く取れるよ」と父は「むすめふさはせ」の決まり字を教えてくれた。また、祖母と両親は観世流の謡曲をたしなんでいた。

祖母が中目の生計を考えて作った果樹園も私が娘時代を過ごした家も今はない。複雑な思いで当時の大変な労働に想いを馳せる。

大正の末期、福原に隠居所を建てて以来、社会は激変している。家を建てた時植えられた山帽子が、見事に大きな枝を広げている。山帽子は時代の盛衰をしっかりと見てきている。ハンモックで午睡を楽しんだ時代へは戻れない。私と妹の名前（珠枝と房枝）には、果樹名、リングとブドウにそれを支える「枝」が遣われている。しっかり土に根を張り、実り多い人生への応援を願って、命名されたという。いま、水沢の果樹園は義妹の手で姿を変え、野草園として、訪れる人々へ安らぎを与えてくれている。

IV. 半田たき（1871－1956）の明治後期の英国留学（1906～1908年）：Studley College（Warwickshire）の学生生活とスコットランドのElla Christieの地所Cowden Castleで日本式庭園をデザインする（1908）

英国留学の経緯について『想ひ出の記』には次のように記される：「多年の宿望なる洋行の道が漸く開かれた。私の希望を知るデントン先生は、何とかして道をつけたいと常に心掛けて下さった様である。然し私には知らないで、密かに適当な学校を選んで下さった。私は先年肺炎を患ひしことは既に前に述べたが、其後は園芸を楽しむ様になったので、尤も適当な学校として、デ師の眼に止まったのは、米国ではなく英国に唯一つある「ウオーリック」夫人の経営にかかる婦人の農科大学、スタッドレーカレッヂを選んで、奨学金のことまで世話して下さった」（中目、1954：64）。

たきは1906年（明治39年）7月同志社女学校を退職し、8月英国留学に向けて日本郵船若狭丸6200トンで門司港を出発した。たきは37歳であった。ドイツのベルリンに留学する兄とマルセイユまで同行した。56日後、たきは英国に到着した。まず、船は英国テームズ河口グレビセ

は大抵天鵝絨の如く短く切り込み、處々に花園をしつらへたり。セダーオフレバノンは実に見事な庭木なり。元来富豪の所有なりしと見えて庭木の種類其数等も夥だしく集められたり。現今練習用に使用する温室十三室の内十一室迄は百年前此建築の創成と共に設けられたるものなりと云ふ。校内に使用する電気燈をつけ蒸気管又は板を引く機械を廻すことも一切附属の蒸気機関の運転によりて営まる」(半田, 1909: 56-57)。

寄宿舎は年間800円。寄宿舎では、たきはキュービクルと呼ばれる一室に2～3、4人が同居する部屋で暮らした。このタイプは寄宿学生40人のうち3分の2が利用している部屋であった。

英国での服装についてたきは「デントン先生の勧めに従って、和服にて通す積りであったが、作業には不便である。併し和服は歓迎せられた。数日の後作業服が出来上がる迄は、只見習生として参観した。」(中目, 1954: 76)と述べる。たきがスタッドレー・カレッジに入学した翌日「校長とベネット嬢(学校の書記)に伴はれて、ボルミンガムに作業服及其他必要品を買整へに行った」(中目, 1954: 75)。図15はスタッドレー・カレッジの学生の集合写真である。写真ではたきは作業着のエプロンを着用している。



図15 写真の裏にはたきが自筆で「明治四十年頃英国ウォリック州スタッドレー村ニ在ルスタッドレー・カレッジニ於ケル校長諸教授学生全部の撮影」と記している

(出典：星珠枝提供、中目家所蔵：たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」(資料(c)より))

一方、カレッジの生活ではフォーマル・ディナー時などの社交の機会にたきは和服を着用した：「七時になれば終日着たる仕事着を脱ぎ去り、イーブニングドレスに更む。之れにはいつも和服を用いたるが其着心地の楽なことは之れに優るものなく一日の労苦も殆んど忘れて何となくうれしく家に帰りたる様な心地せり」(半田, 1909: 60)。

たきにとって和服は、みずからくつろげる服装であったが、同時にたきの和服は西欧人に注目を集めた：「遙々東洋の果てより来りしとて皆が珍らしがり数々茶話に招きしが注文はいつも和服着用…」(半田, 1909: 61)。

たきはスタッドレー・カレッジの設立者であるウォーリック伯夫人に招かれたときも：「午後のお茶は此庭園内にて配せられた。十歳余の令息を伴はれて夫人が、私がお茶を頂いている處に来てお話をせられ、私が和服に袴を穿いたのを珍しがられた」(中目, 1954: 83)。

図16は、カレッジ内で撮影された和服姿のたきである。たきのカレッジでのニックネームは「リツツルタキ」であり、そのうえたきは若く見られることが多く「十七八の娘扱ひを受けし心地はよきものにはあらざりき」（半田，1909：61）と語る。

学生生活の一日をたきは次のように記録する：

- ラッパの警報（七時五十分に吹く）→礼拝は大広間なる共同室にて為されたり。
- 朝の食事はお汁に香物と云ふ如くおきまりはボレッヂ（麦を柔らかかに煮たものに砂糖と牛乳とをかけて食す）ボイルドエッグかスクランブルドエッグ、時々はベーコン、ハムが上ることもある。パンにバター、ジャム、飲料は茶かコーヒー、好きなものを拵んで食す。
- 八時四十分には、ブーツルームに集まり、仕事靴を穿き更へ、前掛をつけてそれぞれ課業に出て行く。
- 養鶏科の学生は其实地練習場へ、デーレー科（バター、チーズを作る處）の学生は自分の練習場へ。園芸練習場は最も遠し、急ぎ足にて5分を要す。
- 九時半迄は各受持の温室・フレームの掃除灌水をなし、それより一室に集まり園丁長より夫々種々なる仕事を申しつけらる。播種、鉢植移植、間引、剪定、草抜き、掃除、枯葉集め、蘇あつめ、花摘み等あり、時にはジャム製造の手伝もあり…。驢馬は侮れない、驢馬を慰めなく慰め、途方に暮れることしばしば…。
- 十一時に十分の休憩
- 再び働きを續く：果樹の剪定、耕地（ぢたがやし）、球根類を鉢へ植込む、肥料積みかへ、菊畑で贅薔を摘み捨て篠竹を立てて結びつくる、葡萄を蔓より切りて籠に荷造りなど…。
- 十二時四十五分の鐘→寄宿舎に帰る：昼食 食卓に就けば快談百出し、給仕人をして失笑せしむる如き事数々あり（以上、半田，1909：68-60）
- 温帯植物の温室栽培法 鉢栽培法・人工授粉
- 講義 「半日作業をすれば半日は講義を聴く、園芸の講義の外に肥料、害虫学・植物学・地質学・簿記法、其他養鶏科等各々専門の講師の講義が夜七時迄続くことがある。」



図16 Studley College の花園の入口アーチのもとで和装の半田たき

（出典：星珠枝提供、中目家所蔵：たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」（資料(c)より））

(中目, 1954 : 78)

スタッドレー・カレッジの園芸科の多くの学生は、入学2年目の6月に実施される「英国園芸学会 Royal Horticultural Society」の資格試験を目指していた。たきも1908年6月の試験に合格した。

ii) スコットランドの Ella Christie の地所 Cowden Castle で日本式庭園をデザインする (1908)

半田たきは、スタッドレー・カレッジに留学中の1908年1月にスコットランドの Ella Christie の地所 Cowden Castle におもむき日本式庭園をデザインした。その契機をたきは『想ひ出の記』に次のように記す：「デントン先生の手紙の内に、蘇蘭に行つて、クリスティ嬢を助けてあげよとのがあつたが、同嬢より日本式庭を造りたいから援助を依頼する由の通信を受けた」(中目, 1954 : 93)。

『想ひ出の記』をたどりながらたきの視点から Cowden Castle の日本式庭園の造園のプロセスの概略を追うことにしよう。

たきは学校の休みを利用して1908年1月 Cowden Castle の地所を訪問しエラ・クリスティーをたすけて日本庭園を造園する。たきは1月のはじめの訪問を次のように記録する：「割合に閑散な日を選び、校長の許可を得て、明治41年1月28日に出発して、蘇蘭の「ドラ」と云ふ地方の小邑に行つて、クリスティ嬢に面会し庭に就ての希望を聞き、地形と広さを見て概略の見取図を描いて数日間滞在し、尚四月の休暇に改めて出張、着手せんことを約して一旦帰校した」(中目, 1954 : 92-93)。

たきはスタッドレー・カレッジに戻つてからも試験勉強の合間に庭園のデザインに取り組んだ：「偕て学校に帰つて後は学会の試験を控へているので、緊張の内に勉強しながら隙をみては、築庭の構想を練り見取図の中に書き入れて略ぼ出来上つた。敷地の広さは約二エーカー(我国の約一町歩位?) 築山と平庭の二部に別れた。中央に鴨寄の池あり。傍にボートハウスもある。此池の一方東側には池を掘つたときの土かと思はるる自然の坂がある。平坦地と坂地の境には池に導かれて小溪がある。一丈あまりの段階をなして自然の滝を形成している処あり。是等を皆利用して築庭せんと試みた」(中目, 1954 : 93)。

同年4月、第二回目の訪問で日本庭園を着工した：

先づ三人の人夫来る。クリスティ嬢は何とかして橋をかけたいとの注文である。依つて池の辺に溝を掘りて中島を作り、其土を以て中島の築山をこしらへ、溝のしがらみを中ころの石にて石垣の様に畳み、其溝に橋をかけて中島に渡る様にしたのを嬢は大に喜ばれた。中島には石を数ヶ所に据え、石の傍らにつゝじ、つげ、石南木の如きものを植え芝生を以て地面を被ひ、一寸面白き景が出来揚つた。坂地には大小の築山を作り、庭石

を据え、中島の植木と同様のものを植込み、粉引白の古い石を組み立て、石燈籠の形を現はしたりする度に、変り行く庭の面を見ては狂喜せられ人夫どもも驚きを以て眺め賞讃の言葉を放ち、大いに興味を以てよく働いてくれた。然し其指揮は実に六ヶしかつた。屢々自分で鋤を取つて形を直さなければならなかつた。彼らはピラミツドの如き三角を造り、四角形にしたりするので、角を除きてなだらかにするには矢張自分の手を要した。人夫どもは日本の庭をみたことがないのであるから、無理もなかつた。(中目, 1954 : 94)

たきの三度目の Cowden Castle 訪問は8月であった。：「八月初旬に再びクリスティ嬢の許に至たり、春中止してゐた仕事を続けたが、国元より帰国を促がして来るので、八分通り終わった頃には石燈籠の据え場所など図中に示して置いて、残念なから別れを告ぐることになった。燈籠をロンドンにて探しても、望み通りのものなく、遂に日本へ注文を出してあるが未着であった」(中目, 1954 : 95)。

たきが実際に Cowden Castle に足を運んだのは1908年1月4月8月の3回であり、たきは、1908年10月には日本へ帰国に向けて英国を旅立った。

いままで語られていたエラ・クリスティーによる Cowden Castle の日本庭園造園の物語は主として英国側の資料によっていた (Tachibana, 2000; Tachibana et al, 2004; 橘, 2008)。英国側の資料では、庭園デザイナーとしてはじめにエラに雇われたのはタキ・ホンダ Taki Honda という日本女性とされていた (Stewart, 1955: 211)。これは正しくは、半田たき Taki Handa

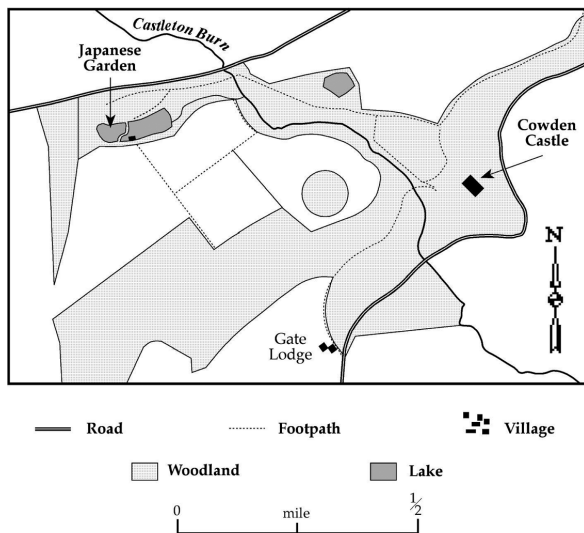


Figure 10. Japanese garden at Cowden Castle, Dollar, Clackmannanshire

図17 コウデン城地所の日本庭園の位置

(出典：Tachibana et al, 2004)

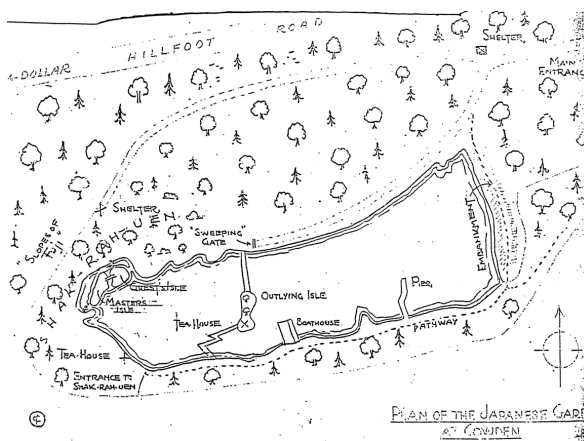


図18 資料(d)の Robert Stewart (1955) による日本庭園のスケッチマップ

(出典：Robert Stewart 氏提供)

であった。

資料によると彼女は、名古屋の「ロイヤル・スクール・オブ・ガーデン・デザイン」 Royal School of Garden Design at Nagoya の出身だとされていた (Stewart, 1955: 211)。英国側の Taki Honda=Taki Handa に関する一次資料は乏しかった。

英国側の一次資料によると1925年から1936年頃まで Cowden Castle の日本庭園に関わるのが Professor Suzuki という名古屋出身の庭園デザイナーであり、この Suzuki の紹介で Matsuo という庭師が日常の庭園管理にたずさわった (Tachibana, 2000; Tachibana et al, 2004; 橘, 2008)。Taki Honda=Taki Handa と名古屋とのコネクションが想像され語られたのは、Suzuki が名古屋出身であったからだろうか。

たきは日本に帰国後におそらく Professor Suzuki と思われる「名古屋の築庭家」から連絡を受け取る：「帰国後数年後であった。或未知の紳士より一通の書簡を受けた。不審に堪へず。或は、間違いにはあらずやと開封して読んでみれば、名古屋のある築庭家にて、ロンドンに出張中、クリスティ嬢の依頼により、私が考案した日本式築庭を視察したという批判の書であつた。唯一か所変更した。即雪見燈籠の据へ處を湖岸より水中に移したのみにて、他は訂正する處なかったとのことであつた。実は自分から法式に叶へるか何うかも考へず、築庭書を検べて後は、感じにまかせて築きしのみにて、築庭家の如き人に見られては恥ずかしき次第に思つて居たのに、斯る批判を受け恥入ながらも嬉しくもあつた」(中目, 1954 : 97)。

たきがエラ・クリスティを助けて Cowden Castle に日本式庭園をデザインし築庭したときの記念に、たきはエラから「別れに臨みて蘇蘭の名所画帳を贈られた。」(中目, 1954 : 95) と

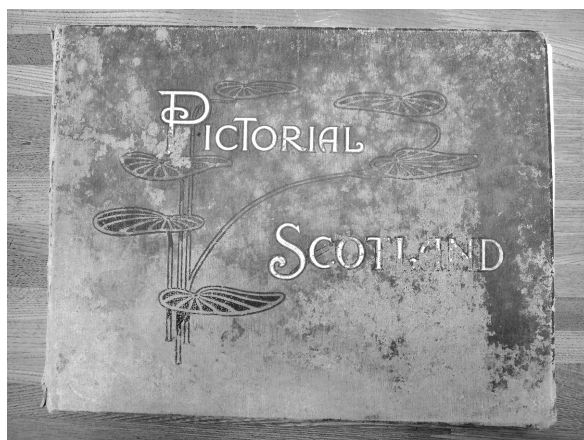


図19 たきがエラ・クリスティから記念に贈られた *Pictorial Scotland* (1902) の表紙

(出典：中目家所蔵)

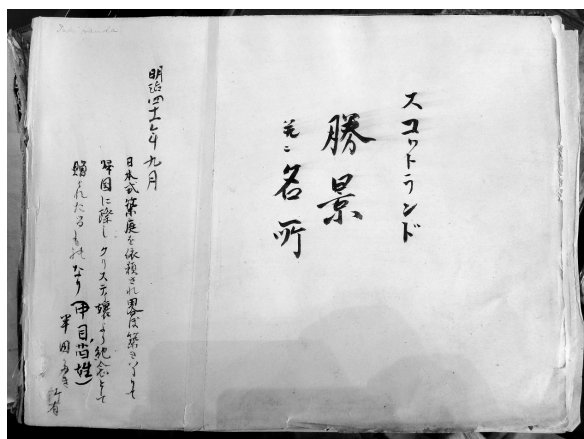


図20 たきがエラ・クリスティから記念に贈られた *Pictorial Scotland* (1902) に記した覚え書き

(出典：中目家所蔵)

『想ひ出の記』に記されている。いまでも水沢の中目家には、『蘇蘭の名所画帳』*Pictorial Scotland* が蔵書として所蔵されている。*Pictorial Scotland* は、Cassell & Company によって1902年に刊行された。*Pictorial Scotland* には、220のスコットランドの景勝地や名所旧跡についての図像 illustrations がおさめられている。

Cowden Castle の日本庭園造園について、半田たきの側の資料を精査してみると、たきはこの庭園を「日本式築庭」「日本式庭」と一貫して呼んでいる。たきがエラから記念に贈られた *Pictorial Scotland* のはじめの頁にも、たきによって次のように覚え書きがしめされている：

「スコットランド景勝並ニ名所

明治四十一年九月

日本式築庭を依頼され略ぼ築き了りて

帰国に際しクリスティ嬢より記念として贈られたるものなり

(中目ノ旧姓) 半田たき所有」

A. Stewart による *Alicella* (エラと妹のアリス姉妹の伝記) などの英国側の資料によると、エラの日本庭園は、‘Shah-rak-uen’ と命名され、湖につながる日本風の野趣のある門に、この名前が示された (Stewart, 1955: 211)。エラは、‘Shah-rak-uen’ とは、「愉しみと喜びの場所」‘a place of pleasure and delight’ だと説明を受けた。しかしながら、半田たきの資料のどこにも ‘Shah-rak-uen’ の名前をみつけることはできない。おそらく ‘Shah-rak-uen’ というのは、Professor Suzuki が遂行したエラの庭園の改造の時代に名付けられた名前であろう。

英国側にはたきに関する一次資料はほとんど伝えられていない。数少ない英国側の Taki Honda=Taki Handa についての一次資料として、現在エラの地所 Cowden Castle を引き継いでいる Robert Stewart 氏のもとに写真が残されている。和服の半田たきの姿である。

今回、半田たきの孫の星珠枝によって、スチュワート一家に提示されたのは、この写真と同じきものを着用した半田たきの写真であった (図22)。これによっても Taki Honda=Taki Handa であることがま



図21 Taki Honda の肖像写真
(出典：Robert Stewart 氏提供)



図22 スチュワート家につたえられる Taki Honda の写真と同じきものを着用する半田たき（前列一番左）。たきの娘富美子の結婚式

（出典：星珠枝提供、中目家所蔵：たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」（資料(c)より）



図24 エラ・クリスティーと妹アリスの孫、ロバートとグリゼル・スチュワート兄妹

（出典：星珠枝提供、中目家所蔵：たきの「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」（資料(c)より）

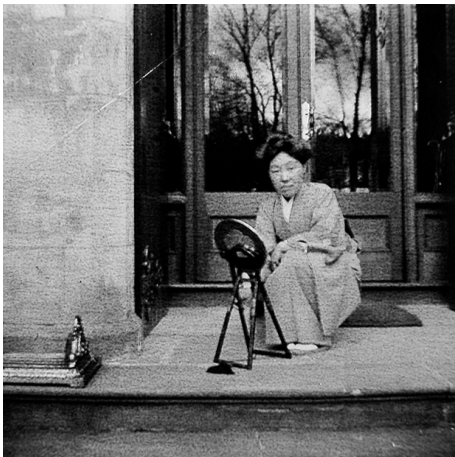


図23 Cowden Castle の玄関にて手鏡のまえにたたずむ半田たき

（出典：Sir Robert Stewart 所蔵）

すます確かとなった。

さらに、今回 Robert Stewart 氏は、たきの Cowden Castle 滞在時の写真を見せて下さった。図23の写真は、たきの孫である星珠枝も未見であった。

たきの整理したアルバム「昭和廿参年正月七拾八歳の時整理せし記念アルバム」（資料(c)より）には Cowden Castle の日本庭園の写真が多く所蔵される。多くは、たきが完成を実見していない後年の日本庭園の風景であった。

図24の写真は、たきのアルバムの中では、「ご近所の友人」と記されていたが、エラ・クリスティーの妹アリスの孫、ロバートとグリゼル・スチュワート兄妹であることが、ご本人のロバート・スチュワート氏によって明らかとなった。

iii) 星珠枝による Cowden Castle の日本式庭園・スチュワート家訪問記（2011年6月13日）

中世の街並みスターリングを抜け、スチュワート家に向かっている。午前10時。車窓に映る青い牧草地がどこまでも、どこまでも続いている。念願の夢に描いた Cowden Castle 訪問が目の前に迫っていた。何十年も心に描き待ち続けた「祖母が手伝ったスコットランドの日本式庭園」に胸がドキドキする。土地勘は全くないので、同行の橘先生と運転手に任せるしかない。はじめての訪問なのに、旧知の人々を訪ねるかのような心のときめきは何故なのだろう。日本式庭園の地図、写真、スチュワート氏すべてを写真や論文で読んでいるため旧知のような錯覚に陥ってしまうのであろう？

とある家の門が自動で開き、車が玄関前にとまった。家のドアが開きスチュワート氏ご夫妻が小走りに出て来られ、橘先生と挨拶している。紹介いただいた私、「たきの孫です」と挨拶する。ともに孫世代の再会である。やさしい抱擁のなかで涙が止まらない。室内に案内頂く。とても温かく、和やかな雰囲気が、一気に緊張をほどいてくれた。やっぱり、緊張していたのだ。用意されていた見覚えのある日本式庭園の写真や書簡とともに、はじめて見る祖母の写真に目がとまった。玄関前にたたずむ手鏡を見つめる「祖母の写真」、見たこともない女らしさにあふれていた。私の知らない祖母がそこにいた。

通訳橘先生を介しての会話はなんとか理解できた。平泉秀平塗の漆器、祖母が祖母である証明を兼ねて、我が家にある祖母の留学時の写真をブックにまとめてお土産にした。とても喜んでいただいた。

いよいよ日本式庭園の見学となる。見学前にエラ・クリスティー嬢とマツオ氏のお墓にお参りした。ゲートに向かう。留守居の方におことわりして門を開けてもらう。期せずしてスチュワート氏と私が同時に扉に手をかけている。きしむ扉に長い歳月を知る。そこからキャッスルロードは玄関まで続いていた。シャクナゲの赤い花が満開に咲き乱れていた。相当の樹齢を感じる。

うっそうと続く森に、車が通れる細い道が続いている。スチュワート氏が「ミステリーツアーにご案内します」とウイットに富んだ、語り口調で呼びかけてくださった。1908年築庭。丘陵、沼地等をうまく利用した庭園である。塔だけが残っている今はないキャッスルの玄関前に立つ。写真に映る枝を広げた木々。長い年月、これらの木々は何を見てきたのだろう。問いかけたくなる。祖母の玄関前の写真は、時の流れのすべてを熟知していることだろう。愛犬黒君が先導して小走りに駆けていく。

沼の水面のスイレンは8月、黄色い花を咲かせるそうだ。

鬼アザミが、侵入者の危険から庭園をまもってくれている。

苔むした燈籠。祖母が日本に帰る寸前まで到着を待ち望んだ燈籠。到着を確かめることができず長い期間気にかけていた祖母の気持を知っている人は、もういない。

目に映る庭園の風景は、どれもクロード・モネの一幅の絵を観ているようだ。

言葉もなく、2時間あまりを散策した。なにも語らない木樹。湖面に映る透明な沼の底。祖母の手のぬくもり、声までも生き生きと身近に聞こえてくる。時折、ふりそそぐシャワー、ぬかるみに足をとられる。その冷たさが、身体の間々まで、浸透してゆく。潔い冷たさは祖母の決意の象徴なのか。何物にも勝る宝を遺してくれてありがとう。

昼食は、夫人手作りのお食事を美味しくいただいた。

DOLLAR ドーラー・ミュージアムを訪ねる。 同日午後

午後3時を廻っていた。Cowden Castleの日本庭園跡地の見学に時間がかかり、学芸員のジャネットさんを大変お待たせしてしまった。実は訪問した月曜日は休館日にもかかわらず、資料を準備して待っていてくださった。

ミュージアム訪問の目的は、資料を見せていただくことは勿論であったが、祖母の名前が異なって記述されていること、たきの出身校が違っていたこと。この2点は、家族として、是非訂正してほしいと考えていた。半田たきが、TAKI・HONDAに、出身校は同志社女学校師範科卒が、名古屋の「ロイヤル・スクール・オブ・ガーデン・デザイン」の出身となっていた。新事実が明確になった今、正確な表記を期待している。

ミュージアムに展示されている



図25 エラ・クリスティーの地所 Cowden Castle の日本庭園跡地にて、星珠枝とロバート・スチュワート両氏

(撮影：橋セツ)

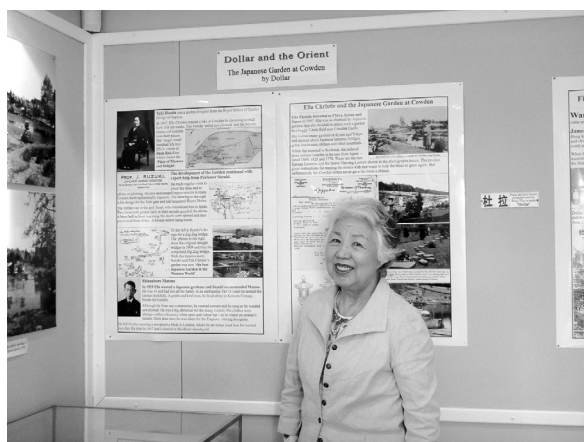


図26 Dollar Museum の Cowden Castle の日本庭園についての展示の前に立つ星珠枝

(撮影：橋セツ)

Cowden Castle の日本式庭園についての説明文に祖母たきとマツオ氏の写真が写っていた。マツオ氏は、たき、スズキ氏とともに、日本庭園とかかわり、庭師として、長いこと働き、この地で亡くなっている。

日本式庭園にかかわった日本人と一緒に、私は写真に収まった。不思議な感覚である。

時間を超越し、関係者がジャパニーズ・ガーデンを仲立ちの一つに結ばれた幸せなひとときであった。

6月13日の Cowden Castle 訪問は、生涯に味わうことのできない至福のひとときとなった。メモリーディーに感謝！！



図27 1930年ころの Cowden Castle の日本庭園とエラ・クリスティー

(出典：Robert Stewart 氏提供)

謝辞

本稿を執筆するにあたり、私たちは以下の方々に大変お世話になりました：Sir Robert and Grizel Stewart ご夫妻、中目一行・静子ご夫妻、佐藤房枝・誠ご夫妻、千種幸子氏、半田敏久氏、八幡和三郎氏（歴史研究）、Janet Carolan 氏（Honorary Curator, Dollar Museum）、島口氏（同志社女子大学史料室）、坂本清音教授・大島中正教授（同志社女子大学）、田口輝子氏（日本スコットランド協会）、梶原由佳氏（カナダ、トロント図書館）、赤嶺正治氏（日本郵船歴史博物館）、箱根富士屋ホテル、日光金谷ホテル。以上の方々に記して深く感謝いたします。

参考文献

- 小野恵美子（1988）『日米の懸け橋：日本の女子教育に捧げたデントンの生涯』大阪書籍
クラップ, F.B. (2007) 『ミス・デントン：「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年』同志社女子大学同志社同窓会
白幡洋三郎（1994）『プラント・ハンター』講談社
鈴木誠編（2006）『海外の日本庭園』日本造園学会
本多錦吉郎（鈴木誠編）（2007（原著は1890））『図解庭造法』マール社
橘セツ（2006）「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』第8号（p.89-104）
橘セツ（2008）「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」(p.31-49)『神戸山手大学紀要』10号
橘セツ（2009）「庭園のなかの野生と異文化：ウィリアム・ロビンソン『ワイルド・ガーデン』（1870）の思想と実践について」(p.141-156)『神戸山手大学紀要』11号

- 橘セツ (2010) 「英国のカントリーハウス庭園とボライト・ツーリスト：19世紀後半から20世紀のニュー
ステッド・アビーを中心に」 (p.71-89) 『神戸山手大学紀要』 12号
- 同志社女子大学125年編集委員会 (2000) 『同志社女子大学125年』 同志社女子大学
- 中目たき編、中目成一 (1939) 『偲ぶ草：中目成一追悼記』 (個人出版：発行者中目誠吾)
- 中目たき (1954) 『想ひ出の記』 協栄新聞社出版局
- 半田たき (1909) 「粗末なお土産話」 『期報』 27号 (p.53-61) 同志社女学校
- 半田たき (1910) 「粗末なお土産話 (続)」 『期報』 28号 (p.21-25) 同志社女学校
- 藤田敬治 (2006) 『「自分史」を書く喜び』 出窓社
- 藤田啓治 (2006) 『私と出会うための三代紀年表』 出窓社
- Berger, J. (1972) *Ways of seeing*. Penguin books.
- Birkett, Dea. (1989) *Spinsters Abroad: Victorian Lady Explorers*. Basil Blackwell. Oxford.
- Christie, Ella and Stewart, Alice King. (1940) *A Long Look at Life: By Two Victorians*. Seeley Service.
London.
- Christie, Ella. (1925) *Through Khiva to Golden Samarkand*. Seeley Service. London.
- Conder, Josiah. (1893) *Landscape gardening in Japan*. Kelly and Co. Tokio.
- Conway, Judith. (1988) *Japanese Influences on English Gardens*. Unpublished thesis submitted for
Architectural Association, Conservation of Gardens Course.
- Cosgrove, Denis and Daniels, Stephen. (1988) *Iconography of Landscape*. Cambridge University Press.
- Daniels, Stephen. (1993) *Fields of Vision: Landscape Imagery and National Identity in England and the
United States*. Polity Press.
- Daniels, Stephen and Nash, Catherine. (2004) 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical
Geography*. 30-3. (449-458)
- France, Peter and St Clair, William (2002) *Mapping Lives: the Uses of Biography*. Oxford University Press.
- Herries, A (2001) *Japanese Gardens in Britain*. Shire Books. Princes Risborough.
- Mitchell, W.J.T. (1994) *Landscape and Power*. Chicago University Press.
- Stewart, Averil. (1955) 'Alicella': *A Memoir of Alice King Stewart and Ella Christie*. John Murray. London.
- Stewart, Robert (1955) *The Japanese Gardens at Cowden: A Brief History and description*. Produced by the
Episcopal church of St James, Dollar, on the occasion of a special opening of the gardens in aid of
church funds, on the 28th May 1955. Privately Printed.
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants and cross-cultural landscapes: British representation of Japan, 1860-
1914*. Unpublished PhD thesis submitted to the University of Nottingham.
- Tachibana, Setsu, Daniels, Stephen and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain:
landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394)

資料紹介

中目たき (1954) 『想ひ出の記』 協栄新聞社出版局 p.92-97

「蘇蘭 (スコットランド) に於ける日本式築庭

デントン先生の手紙の内に、蘇蘭に行つて、クリスティ嬢を助けてあげよとのがあつたが、同嬢より日本式庭を造りたいから援助を依頼する由の通信を受けた。

割合に閑散な日を選び、校長の許可を得て、明治四十一年一月二十八日に出発して、蘇蘭の「ドラ」と云ふ地方の小邑に行つて、クリスティ嬢に面会し庭に就ての希望を聞き、地形と広さを見て概略の見取図を描いて数日間滞在し、尚四月の休暇に改めて出張、着手せんことを約して一旦帰校した。

「ドラ」は蘇蘭の主府エディンバラの北方、汽車にて約二時間半の行程にある。

此処の中学校は相当有名なもの、由聞き及ぶ。

クリステイ嬢の邸宅は、停車場より自動車にて十四、五分間を要する処にあり。此地方は英蘭（イングランド）に比し低温にして、深からざるも積雪ありて、我国の眺望に以たるものある様に思はれ、美しい景色である。異なるものは丘陵などに樹木なく、牧草青々と羊群が點々と草を飼みつゝあることである。

因みに記す、英国にては一体に寒中にては牧草青々として、恰ど我国の夏の稲田を見る心地である。

偕て学校に帰りて後は学士会の試験を控へてゐるので、緊張の内に勉強しながら隙をみては、築庭の構想を練り見取図の中に書き入れて略ぼ出来上つた。敷地の広さは約二エーカー（我国の約一町歩位？）築山と平庭の二部に別れた。

中央に鴨寄の池あり。傍にボートハウスもある。此池の一方東側には池を掘つたときの土かと思はるゝ、自然の坂がある。平坦地と坂地の境には池に導かれて小溪がある。一丈あまりの段階をなして自然の滝を形成してゐる処あり。是等を皆利用して築庭せんと試みた。四月二十二日の夜汽車にて再び蘇蘭ドラに向ふ。

翌朝主府エディンバラに着き、ベネット嬢（学校の書記ベネット女史の令妹）に迎へられ同嬢の案内にて、終日市内、城跡、大学等を見物して、午後六時四十分発にてドーラに着きクリステイ嬢よりの迎への自動車にて、九時頃嬢のお宅に落着いた。

兩三日の間は池辺に出でて見取り図と較べ合はして、愈々確信を得て作業に取りかゝる。

先づ三人の人夫来る。クリステイ嬢は何とかして橋をかけたいとの注文である。依つて池の辺に溝を掘りて中島を作り、其土を以て中島の築山をこしらへ、溝のしがらみを中ころの石にて石垣の様に積み、其溝に橋をかけて中島に渡る様にしたのを嬢は大に喜ばれた。

中島には石を数ヶ所に据え、石の傍につゝじ、つげ、石南木の如きものを植え芝生を以て地面を被ひ、一寸面白き景が出来揚つた。

坂地には大小の築山を作り、庭石を据え、中島の植木と同様のものを植込み、粉引白の古き石を組み立て、石燈籠の形を現はしたりする度に、変り行く庭の面を見ては狂喜せられ人夫どもも驚きを以て眺め賞讃の言葉を放ち、大いに興味を以て能く働いてくれた。然し其指揮は実に六ヶしかつた。屢々自分で鍬を取つて形を直さなければならなかつた。彼等はピラミッドの如き三角を造り、四角形にしたりするので、角を除きてなだらかにするには矢張自分の手を要した。人夫どもは日本の庭を見たことがないのであるから、無理もなかつた。英国では日本庭園と云へば只鳥居を立て、石燈籠を据えるのみである。クリステイ嬢は、訪問客があれば必ず爰に案内して見て貰はるゝのであつた。作業中湿つぱい日が多いので難儀したが、人夫等は勤勉にて雨中にては正直に能く働くのには感心した。日本の労働者に比して、数等勝つてゐると思つた。朝の八時より午後五時と云ふ約束であつた。休み時間は十二時より一時迄にて、時間を守ることも忠実である。

春休暇の三週間にては到底竣工難しかつたから、一旦帰校して夏又来らん事を約して帰る途中、ロンドンにて一ヶ月間遊んで八月に再び来る迄は、学校にて養鶏法を学んだ。

八月初旬に再びクリステイ嬢の許に至り、春中止してゐた仕事を続けたが、国元より帰国を促がして来るので、八部通り終わつた頃には石燈籠の据え場所など図中に示して置いて、残念ながら別れを告ぐる事になつた。燈籠をロンドンにて探しても、望み通りのものなく、遂に日本へ注文を出してあるが未着であつた。クリステイ嬢の友人にて斯様の庭を造りたいからとの話もあつたが断つて、帰国支度に取りかゝつた。別れに臨みて蘇蘭の名所画帳を贈られた。滞在中は家政婦のグラツシー嬢と同様の待遇を受け、三階の一室を与へられ食事も同様に一緒にした。室は十畳敷位のものにて、小さいながらも暖炉付にて、裝飾を施し置時計もあり、ベッドには絹製のロシヤ更紗の羽毛布団をかけ、朝夕に洗面の為めの

湯を運び来り暖炉の火を燃いてくれるし、夕刻仕事を終りて帰る頃には、暖炉を燃いて室を暖めてあるし、手当として週に一磅（ポンド）与へられた。クリステイ嬢は五十三才未満の中老の婦人にして、親譲りの財産二千エーカーの土地と豪壮な住家（カオデン城と云ふ）とを所有し、住家の中に図書室あり、美術室あり、爰には油絵の大小三百から四百枚を以て壁を飾り、各国の美術品を集めパイプオルガンを備へ付けてあり、其他ピアノも客室に幾台かを据へてある。

常用の雇人の中三人は掃除婦にて、客室と廊下、図書室、美術室等に働き、炊事婦二名、嬢自身専用の婢一名、給仕の男二名、一人は五十才と十八九のものにて、尚洗濯婦一名、運転手二名、馬車二台、自動車二台、鶏鴨等鳥類の飼育者一名、乳牛世話方（バターやチーズをも自製）二名？あり。温室及野菜、果樹の世話する男三名、庭園内樹木の手入れ方五六名及牧場等に多くの雇人があるらしかった。野には馬も自用のものを飼つてあつた。是等の雇人を自身支配せらるゝことは多忙であつたに違いない、家政婦は主婦の命を受けて、指揮を分担してゐられた。ロンドンに一別荘と南仏に避寒の別荘を有して贅沢な暮しであつた。厳寒の候には南仏に住ひ、夏には自家に帰来て友人を招き楽しまるゝ時の道具に、日本式庭も築かれた。財管理には一弁護士を頼んであつた。

クリステイ嬢の留守の間は、家政婦が留守番をしてゐらるゝ由。クリステイ嬢には令妹が一人あつて、同等位の資産家に嫁してゐられ二男を有せらるゝので、遺産は其次男のものと既に決定済と聞いた。米国の事は知らない、英国にても富豪と云はるゝ人の榮華は、中々日本人の及び難いものである。嬢の邸宅でさへ廊下の壁に三疊敷位の硝子鏡を塗りこんであるので、階段を上るとき屢々誰か出て来たのかと驚いて見れば、鏡に映りし自分の姿である滑稽感を以て、頬笑みをもらしたことである。帰国後数年後であつた。或未知の紳士より一通の書翰を受けた。不審に堪へず。或は間違にはあらずやと開封して読んでみれば、名古屋のある築庭家にてロンドンに出張中、クリステイ嬢の依頼により、私が考案した日本式築庭を視察したと云ふ批判の書であつた。唯一ヶ所変更した、即雪見燈籠の据へ處を



筆者が英国にて設計せる日本式庭園

（池の西側ポートハウスの景）池は鴨寄せ池にて此處より東側をながめて全景を図にして工作せり
日本式庭園設計依頼者 クリステイ嬢
（注）筆者の設計通り石灯籠が水際に置いてある。



筆者が英国にて設計せる日本式庭園

（池の東方の景）
（名古屋の築庭師が燈籠を水中にうつして後のもの）



筆者が英国にて設計せる日本式庭園

（船乗り場より見たる全景）

湖岸より水中に移したのみにて、他は訂正する處なかつたとのことであつた。実は自分から法式に叶へるか何うかも考へず、築庭書を検べて後は、感じにまかせて築きしのみにて、築庭家の如き人に見られては恥ずかしき次第に思つて居たのに、斯る批判を受け、恥入ながらも嬉しくもあつた。」

「想ひ出の記」目次

一、幼年の久留米時代

- ☐大暴風雨 ☐妹の誕生 ☐糸紡ぎ ☐西南の役（明治十年） ☐山本村の紡績
- ☐管移しと古式の機械 ☐試験で賞品を受けたこと ☐兄上のこと ☐田舎の生活
- ☐高良山参詣 ☐久留米へ帰る ☐かすり織の稽古 ☐誕生の我が家

二、小倉時代

- ☐小倉へ先発三十里の道を徒歩旅行のこと ☐船場へ移転 ☐学事の復活
- ☐兄上沖縄の那覇へ移転のこと

三、熊本時代

- ☐熊本へ移転 ☐相撲町の家 ☐付属小学校 ☐福岡県立女子師範学校へ入学時代のこと
- ☐地震 ☐高師の受験資格を失う ☐第十三連隊の火事と自家物置小屋への放火

四、京都学生時代

- ☐同志社女学校へ入学 ☐母上の病氣 ☐比叡山にて避暑勉強のこと
- ☐四明ヶ嶽山頂の親睦会 ☐日清戦争始まる ☐徳富猪一郎氏の講演
- ☐同志社普通学部卒業 ☐希望は教育者 ☐奉職東京時代（香蘭女学校） ☐植物研究
- ☐中村重治氏の家族 ☐徳富蘆花氏夫妻 ☐徳富蘇峰氏 ☐江の島遊覧
- ☐兄上病のため休職、郷里久留米に移られる。

五、再び京都時代

- ☐母校同志社に帰る ☐松浦先生 ☐理科学校の便と植物採集 ☐松茸狩り
- ☐京都名物の落雷 ☐デントン先生の帰校 ☐気絶昏倒
- ☐レ、ブツィエ氏に従って植物採集旅行（M三十五年） ☐姐上の不幸
- ☐東本願寺大谷伯の葬儀 ☐大阪大博覧会見物と共励会、矯風会に出席
- ☐日本三景の一の宮島見物 ☐肺炎 ☐同志社病院長佐伯理一郎先生 ☐日露戦争
- ☐純子の死 ☐相州網代における大学の臨海実験所の講習会 ☐長谷場純孝氏 ☐泥棒
- ☐同志社のボートレース ☐男子部独特の裸体競走

六、英国留学の途拓ける

- ☐航海 ☐父上の計報 ☐兄上と別れる（マルセーユにて） ☐英国の気候 ☐作業
- ☐講師 ☐英国の家庭 ☐オックスフォードの新年 ☐バラード嬢に招かれる
- ☐シールド夫人に招かれる ☐ウオーリック伯夫人 ☐ターナー夫人
- ☐シェークスピアの生家と記念劇場 ☐明治四十年十月十六日記
- ☐ボルミンガムにおける品評会観覧 ☐こどものためのクリスマスツリー ☐除夜の鐘
- ☐リパプールに於ける万国青年大会に出席 ☐キュービクル ☐騾馬（ドンキー）
- ☐学士会の試験 ☐蘇蘭（スコットランド）に於ける日本式築庭（明治四十一年一月）
- ☐ロンドンの一カ月 ☐ウエスヒールド・カレッジの二週間 ☐英国を去る
- ☐海上暑気の天長節 ☐日本の帰国 ☐郷里の自家にて明治四十二年の新年を迎える

七、三度目の京都

- ☐再び同志社女子部へ奉職（明治四十二年。女専家政科ノ園芸・普通科上級英語）
- ☐幻燈会と小火 ☐結婚問題と神の摂理 ☐家庭生活 ☐仙台に転住
- ☐尚枝疫利にて死亡 ☐水沢福原に居を移す ☐新築落成 ☐福原生活
- ☐中目果樹園と命名 ☐再四京都転住 ☐同志社女学校専任事務（六十二歳）
- ☐十和田湖見物 ☐主人の喜寿 ☐主人の急逝 ☐母上の永眠
- ☐亡父三十三回忌の墓参旅行 ☐ハルピン行き ☐水沢に帰る

昭和二十九年五月吉日

共栄新聞社印刷局 関 博

『想ひ出の記』の文中に記載されているたきの友人・知人・先生等

安藤先生（漢学）アレキサンダー氏 大田牧師 原田愛子 田代先生 クラーク先生 津和崎幸子 奥亀太郎氏

同志社女学校時代 海老名弾正先生 荒木ひろ子 竹内竹子 浜田知亀子 小崎弘道先生 松浦先生
谷先生 木村先生 浜先生 マイヤー デントン ウエンライト 三木東子 内田雪子 徳富猪一郎
板垣つま子 不破申子

奉職時代・東京 ウエストン嬢 津田梅子 中村重治 徳富蘆花夫妻 レ、プツィエ氏夫妻 シャー
ブ嬢 チャールズ ヘンリー 佐伯理一郎先生

飯島其博士 長谷場純孝（政治家）

英国留学 永井柳太郎氏 北村軍医生 内田牧師 レッグ先生

ベネット嬢 イーグルトン講師 バラード嬢 シールド夫人 ウォーリック伯夫人（カレッジの設立者）、
ターナー夫人 フェースフル嬢 マージョソン夫人 セヂュウイック嬢 アトキン牧師 スコットラン
ドに於ける日本式築庭：クリスティー嬢 ベネット嬢

メーナルド女史（女子大学長） リデル嬢 フォーブス嬢（宣教師）

再び同志社 野村義太郎先生 中目家 原田助同志社総長
県立農事試験場 美浦・吉田技師 筒治指導員 松田通子